



## 中国駆け歩き ―水と緑をめぐる旅―

鈴木 陽一

筆者はこの三月十四日から、本学の研究組織のリーダーと共に、中国江南に位置する三大学、上海師範大学、浙江大学、浙江工商大学を訪問した。今回の大学訪問の参加メンバーは、筆者の他に秋山賢治アジア研究センター所長、田上肇常民文化研究所所長、深澤徹人文学研究所所長、馬興国特別招聘教授である。

訪問校も簡単に紹介をしておこう。訪問した上海師範大学は2009年以來のお付き合いで、教員の交換、シンポの開催などすでに様々な学術交流を積み重ねている。浙江工商大学は歴史も新しく、お付き合いは始まったばかりだが、常民文化研究所、非文字資料センターとの学術交流は若手研究者の相互訪問研究など、着々と成果を挙げつつある。浙江大学と浙江工商大学はいずれも浙江省杭州にあり、特に浙江大学とは旧杭州大学以来四半世紀に及ぶ交流の歴史があり、特に九十年代の交流は他大学からも範とされるような成果をあげた。

今回の訪問は極めて短期間ながら、決して儀礼的なものではなく、アジア研究所が総合テーマとして掲げる「アジアの水」をテーマに、各大学の研究者と今後の共同研究の方向について議論すること、また「アジアの水」に関わる場所を見学することであった。幸いにも、馬教授という優れたコーディネーターの働きと、各大学の誠意ある対応により、4泊5日とは思えない成果を上げることができた。

まず我々は上海到着の翌日、上海師範の手配により、江蘇省常熟市を訪問した。同市は長江下流の南側、の江南に位置し、日本で言うところの水郷地帯にあっ

て、早くから発展したことで知られる。今回は、最近開発が進んでいる尚湖という湖の湖岸とその周辺地域を視察したが、従来型の観光地ではなく、自然環境の保全を重視したリゾート地を目指していることが伝わってきた。午前中慌ただしく見て回った後、同市内で水郷常熟の特産を味わった後ただちに大学に戻り、孫遜前人文学院院长、蘇智良現院長らと「アジアにおける水」というテーマでどのような共同研究が可能か意見を交換した。

三日目の朝、新幹線で杭州に移動した。かつてと言ってもたかだか二十数年前だが、六時間かかった上海ー杭州は一時間とかからずに到着する。杭州東駅で下車し、杭州の東北にあり、錢塘江に面する浙江工商大学に向かった。広大で立派なキャンパスに着くとすぐに円卓の会議室で今後の交流についての懇談が開始された。これまで、常民研との交流が活発に行われ、



常熟虞山から見た尚湖



海寧の運河と再現された町並み

人文研のメンバーもそれに参加しているため、アジア研がそこにどう関わっていくかということが議論になったが、今回は時間切れとなった。今後の話し合いに期待することにした。

昼食の後は、大学から錢塘江沿いに下流へ車で小一時間移動し、川沿いの歴史ある町海寧についた。ここでは錢塘江に並行して運河が流れ、その運河沿いに清代の町並みが保存されて観光地となっている。この地域には、満洲族王朝の皇帝乾隆帝の実父と噂された漢族官僚の邸宅も残っているが、最大の観光ポイントは大逆流を鎮めるための塔（占鰲塔）と海神廟である。極端な遠浅の杭州湾に注ぐ錢塘江は、大潮になると海水が上流まで遡ってくる。特に秋の大潮の際には台風などとあいまって、かつては数メートルの高さの浪が繰り返し押し寄せ、あたりは潮水の洪水となり、田畑が被害を受けた。古代の人々は、この逆流の元凶が呉の国王に殺された伍子胥の亡霊にあると考え、これを鎮めんとして様々な対応策を考えたのである。海寧はそうした昔の人々の水との苦闘の歴史を偲ばせる町である。

最終日、我々は杭州西湖のほとりにあるホテルを離れ、工商大学と正反対の西に向かい浙江大学に到着した。そのキャンパスの巨大さに圧倒されながら、

現在建設中の第二キャンパスの西南の角に建設中の大学博物館に向かった。中国の大学のキャンパスはどこでも広大なのだが、浙江大学は中でも大きい。キャンパス完成後には学内を一周するモノレールが計画中であることと、博物館前で写した写真から、その大きさが想像できよう。建設中の博物館は一階が展示、二階が資料室及び図書室、三階が教室、四階がオフィスだとのこと。規模はともかくも、考古学や歴史学にとって、文物の展示と研究と教育とを一体化して行うという方法は真似をしてもよいのではないか。

旅行の最後には豪華なフィナーレが待っていた。まずは杭州の町の北側、かつての日本租界であった大運河の埠頭に到着する。かつての琉球使節はここから舟に乗って北京へ向かった。我々も大運河を少しだけ北上し、そこからもう一つの大運河に向かった。流れのない運河は土砂がたまりやすく、浚渫をしても間に合わなくなると、別の場所に自然の河川を利用した新たな運河を開削することが珍しくなかったのだ。我々が訪問したのは杭州の北に位置する「水北街」というところで、かつては杭州の郊外の物資の集積地として栄えたが、運河が使用不能になったため却って古い町並みなどがそのまま残ったということだ。運河には六百年前に建設された明代の巨大なアーチ橋「広済橋」がかかり、昔の繁栄を垣間見ることができた。だがここでも時間が足らず、町並みは入り口を見たのみ、清代の倉庫群は近づくこともできずに終わった。見学や調査は次回の楽しみにするよりない。

駆け足ながらこれだけのことを見、多くの先生方と語り合うことができたのは、何よりも各大学が本学との交流を重視し、十分な準備と誠実な対応をしてくれたことにある。しかし、それも馬教授が本学の意図を中国側に十分に理解させるべく、交渉したことによって可能になったのだということを申し添え、三大学の関係者と共に馬教授に対しても感謝の意を表明してこの文の結びとする。

(外国語学部 アジア研究センター所員)



建築中の博物館前で



水北街にかかる広済橋